

小説 天戸祐輝

挿絵 uni8

おしかけ お嬢さま

私と同様しなさい!!



二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

第一章 最悪のお嬢さまっ！

第二章 転校生はわがまま美少女っ!!

第三章 大ピンチお嬢さまっ!!

第四章 大胆な幼馴染みっ!!

第五章 由美那の気持ちには……？

第六章 いったい誰の責任をっ!!

登場人物紹介

Characters



ゆみの さき ゆみ な
弓ノ崎 由美那

世界有数の企業である弓ノ崎グループの一人娘。お嬢さま育ちのせいか、見かけは清楚可憐だが、実は唯我独尊のわがまま娘。男性に不信感がある。



さもと かすみ
沙本 香澄

由美那に仕えるメイド。彼女の良き理解者であり、一緒に聡志の部屋に転がり込む。おっとりとした性格で、見事なバストを持つ。

こかぜ りほ
湖風 理穂

聡志のクラスメイトで幼馴染み。聡志に好意を持っており、突然現れた由美那に対抗意識を燃やす。胸が小さいのがコンプレックス。



かわく さとし
川久 聡志

安アパートで一人暮らしをしている少年。由美那たちに声をかけたため、ハプニングに巻き込まれてしまう。

小声で話しながら、香澄がブラのホックを外して両胸を完全に見せてきた。

柔らかそうに揺れる白くて大きな果実に、小さな乳輪の中心で佇む薄赤い頂。

性経験のない少年には、もうたまらない状況だ。今にも理性が弾け飛び、その大きな両胸に掌を埋めたくなってしまう。

「あのビデオの中では胸を使ってみましたから……、私もGカップはあるので、聡志さまの喜ぶことができる……」

ふにゅっ……。

「香澄さん、いきなりそんな……うおっ!」

柔らかいものがペニスの左右から包み込んできた。

フニフニと柔らかく、それなのに張りのある温かな果実は、聡志の腰を甘痒く痺れさせてくる。

「はうっ、んっ、どうですか聡志さま……、私の胸は気持ちいいでしょうか……」

なにかに取り憑かれたと思うような熱心さで、メイドが両手で支えた峰乳を上下に動かしてきた。

ペニスに張り付くように擦れる乳肌の感触と、幹の部分を包み込んでくる彼女の熱い体温。そして亀頭にまで伝わってくるメイドの鼓動に、早くも我慢の限界が近づいてきた。

勃起したモノ全体がヒクつき、痺れるような感覚が下半身に広がってくる。

「うわあああっ! ダメだっつて香澄さん、そんなに激しく擦ったら出ちゃ……出ちゃうっ

てっ!」

「んはあああっ!」

メイドの奉仕をとめようとした両手が彼女の胸に埋まり、掌にコリコリとした乳首が転がってきた。彼女の唇からは艶めかしい声が聞こえ、少年のペニスを限界へと膨らませていく。

初めて女性に奉仕される刺激に、もう童貞少年の下半身は持ち主の言うことなど聞きはしない。こらえようとしても性器全体が勝手に脈動し、尿道に塊りのような濁流が駆け登ってくる。

「出ちゃうっ……香澄さんのおっぱいに出しちゃ……くあああっ!」

びゅぶるるるっ! びゅるるるるるるるるるるっ!

「あんんんんん——っ!」

我慢できず、ペニスに感じる強烈な痺れと同時に、亀頭から熱い奔流が飛び出してしまった。

女性の手で初めて放出させられた精液は、そのまま彼女の胸の谷間で噴き上がり、大きな果実を白く染めていく。

「くうはあああっ! はああはああ……出しちゃった……香澄さんの胸に……すごい気持ちいいおっぱいに……」

下半身に気だるさを感じながら彼女を見てみれば、出された精液を不思議そうな目で見

つめていた。

「ああ……聡志さまのがこんなにいっぱい……、これが精液なのです……私……初めて見ました……」

峰乳に撒かれた白濁液を嬉しそうに見つめた彼女は、乳液でも染み込ませるように両手で胸に塗り込めていく。

(ちよつと、エロすぎるって、そんな姿見せられたら、俺……)

無意識にやった仕種なのだろうが、見ている男にとっては我慢できない。聡志のペニスは放出したばかりだというのに、今まで以上の硬さで反り返ってしまった。

「もう私の胸は聡志さまのものなのに……やっぱり、こんな胸では満足なんてできないのですね……」

射精しても萎えないペニスを見たメイドは悲しげに呟くと、おもむろに立ち上がってスカートを腰まで捲り始めた。

「満足したって、もう十分満足したからっ！ 見えちゃってるよ香澄さん！」

彼女がメイド服を腰まで捲ったおかげで、ニーストッキングに包まれた両脚もガーターベルトも、そして透けたハイレグショーツまで丸見えの状態だ。

彼が想像までして見たかった状態。だけど、少年はその姿を直視できない。

「メイドとして、こんな中途半端な奉仕ではプライドが許しません。聡志さま、もしよろしければ、私の中で満足して……ください……ませ……」

「いいって、そこまでしなくても。香澄さんはステキなメイドさんですっ!」

「でしたら……お願いします……聡志さまので、わ、私のアソコを……」

メイドとしてプライドを持ちすぎのうえ、言い出したら聞かない性格だとは思わなかった。

初めて知った彼女の頑固さに困りながらも、ショーツを太腿まで下ろしていく彼女から、もう一瞬たりとも目が離せない。

顔を真っ赤にして恥ずかしがりながら、栗色の薄い草むらを見せられた彼女の大事な部分からは愛液が溢れ、太腿を濡らしながら白いニーストッキングに染み込んでいく。

(うわっ、アソコからあんなに愛液が、もしかしてパイズリして興奮した?)

「ひゃううっ!」

初めて生で見る愛液に、聡志の手が自然と彼女の淫部に触れてしまった。温かく、少し粘度のある彼女の体液は、次から次へと薄く開いた割れ目から溢れてくる。

「ああっ……聡志さま……私、おかしくなりそうです……さわられたらアソコが切なくて……もう我慢できませんっ」

艶めかしい吐息をもらしたメイドは、おもむろに両手を壁につけて大きなお尻を掲げてきた。

しかし、聡志は初めて見る女の大事なところに目を奪われ、立つことさえできない。

「ああっ! 聡志さま早く……早く私のアソコに……」

艶めかしい声でお尻を左右に振り、あからさまな仕種でねだってきた。

もう我慢なんてできない。聡志はいきり立つペニスを握り、切っ先で淫唇を搔き分けながらメイドの秘孔に亀頭を押し付けた。

「いっ、いくよ香澄さんっ」

コクンと彼女がうなずくのを見て、少年は腰を前に動かす。

ツルンッ！

「ひゃうううっ！」

しかし、挿入しようとした切っ先がいきなりすべり、薄い色の秘粘膜を擦りながらお尻の方へとそれてしまった。

(こんな、もう一回っ！)

「いやあんっ！」

またそれてしまい、危うくお尻の孔に突き刺さりそうになってしまふ。

「ここです聡志さま、早く私の中に……」

なかなか挿入できない彼を導くように、香澄は自ら淫唇を搔き分け、指先で秘孔を押し広げてくれた。

彼女にここまで恥ずかしい真似をさせて、挿入できなかったら男として失格だ。聡志は気合を入れ直して彼女が広げてくれた秘孔に亀頭を押し付け、一気に腰の力を使ってペニスを埋め込んだ。

グニユ……ズニユズニユズニユウウウウウウウッ!

「くあっ! くおおおおおおおおおおっつつつつ!」

「あうっ!? んああああああああああ……っ!」

メイドの膣内に挿入した途端、聡志には想像もできなかった快楽がペニスから伝わってきた。ウネウネとした熱い髪が絡まるようにペニスを擦り、きつい壁が膣内から排出させるように締め付けてくる。

「すごいよ香澄さんっ! きつくてザラザラした壁が絡まって……ぐううっ!」

「あううううッ! 嬉しいです……はうっ……」

ジュリユ……ジュリユジュプジュニユジュプズニユウウウウウウッ! プチッ!

「ひいうううううう——ッ!」

押し戻そうとする壁を無理やりこじ開け、一気に彼女の膣内にペニスを挿入した途端。切っ先で薄膜を突き破った感触と同時に、香澄の唇から純潔を失った声が奏でられた。

「すごいよ……これが女の人の中……俺……もう我慢できないっ!」

ズチャッ!ズリユッ!ズチャズチュッ!

しかし、全身の神経がペニスに集中してしまった聡志に、もう香澄の声は聞こえない。ペニスに絡まる髪は刺激に頭の中でも考えられなくなり、メイドの大きなお尻に腰を叩き付けながら、狭いお風呂場にパンッパンッと肉のぶつかる音を響かせてしまう。

「んああああああッ! もつとゆつくりッ……あうッ! 聡志さまもつとゆつくりいい

「いいいいッ！」

悲鳴にも似たメイドの声が響くが、快楽に没頭した少年は気づかない。ただペニスから伝わってくる狂おしい痺れに夢中になり、大きなお尻を鷲掴みにして激しく腰を振るだけだ。

「はあはあはあ、気持ちいいよ香澄さんの中……、最高だ……」

「うくッ！ 嬉しいです……でも優しく……つうッ！ 優しく動いて……はくッ、うくううッ！」

耐える声が聞こえるが、初体験中の彼には彼女を氣遣っている余裕などない。腰をゆつくり動かそうとしても激しく動いてしまい、膣内の襷をエラ裏で掻き捲ってしまう。

ペニスにはムズ痒い刺激が走りまくり、想像していたよりも気持ちいい膣内の感触に、理性が吹き飛んでしまいそうだ。

（こんなによかったなんて……、もっと……もっと香澄さんの奥まで入りたいっ）

「きゃうんッ！」

気持ちいい膣内の感触をもっと感じようと、思いっきり突き上げた瞬間。偶然女の感じるところに亀頭が擦れ、香澄が濡れた声をあげ肢体をピクンとさせてきた。

「さ……聡志さま今の……あうッ！ あッ、くあッ、ふひゃああッ！」

少しずつメイドの声が変わり始めた。初めての挿入に耐えていた呻きの中に濡れた声が混ざり、肢体の肌がみるみるうちに赤く染まっていく。

異物を拒むように締め付けていた膣壁も、絡み付く襞の動きに合わせて合わせるように奥へとうねり、ペニス全体が今にも彼女の膣に飲み込まれてしまいそうだ。

「くうつつっ！　なんか動きが変わってっ……くああっ!？」

「はうッ！　よくなつて……あうッ！　痺れ……きゃううんッ！」

香澄の声が完全に艶めかしい喘ぎとなつて狭い浴室に響き始めた。肢体も感じていることを物語るように腰をくねらせて震え、肉幹を啜える秘孔がピストンする度に吸い付いてきた。

後ろからでも分かるくらいに大きく揺れている峰乳は、その薄赤い頂から汗と柔肌に撒き散らした精液を飛び散らせ、視覚的にも聡志を興奮させてくる。

「ああうッ！　はふッ！　気持ちいいですッ……あうッ、もつと強く……もつと聡志さまを感じさせてッ！」

「香澄さんっ、香澄っ！」

ジュプッ！　ジュリュッ！　ジュプジュリュッ！

さつきまでとは真逆の求めに、立ちバックのまま大きく揺れていた両胸を後ろから力強く揉み、柔房に掌を喰い込ませながら、激しく腰を動かして彼女の膣内を掻き乱した。

しかし、初めての少年に具合のよくなった膣は耐えられない。

彼女の大きな峰乳で射精したばかりだというのに、もうペニス全体が掻きむしりたくなるような痺れと痒みに包まれ、とめられない脈動が繰り返している。

「うあああつ！ 香澄さんっ、俺……俺っ！」

「はうッ、あッ、ひヤッ、はうんッ！ 私も……私ももうッ！」

狭い浴室に淫らな挿入音と、メイドの濡れた声が断続的に木霊こだまし始めた。

聡志の頭はもう射精することではいっぱいになってしまい、ペニスの内部に強烈なくすぐつたさと痺れが走り、亀頭に向かつて一気に濁液が駆け登っていく。

「うあああつ！ 香澄さんもうダメだつ、出る……出ちゃ……」

「はくうううッ！ 出してくださいッ！ あうッ、はあはあ……私の中に聡志さまの精液いっぱい出してくださいいいいいいいッ！」

どびゆるるるるっ！ びゅぷっ、どびゆるるるるるるるるるるるッッッ！

「くあああああああああつ！」

「熱いッ！ 熱いです聡志さまあああああああ——ッッッ！」

射精を感じた少年は思いっきり香澄のお尻に腹部を叩き付け、後ろから揉んでいた峰乳を驚掴みにしながら、彼女の膣内に大量の精液を迸らせてしまった。

メイドも初めての精液の熱さで彼と同時に絶頂し、肢体を小刻みに震わせながら、秘孔とペニスの隙間から熱い愛液を噴き出している。

「はあはあはあ……、出しちゃった……香澄さんの膣の中にいっぱい……」

息を荒げ、ペニスから伝わってくる甘く痺れるような疲労感に力を抜き、メイドの背中にもたれかかった。



「だって、なにしてもいいって言ったじゃんか、チュルッ」

「でも……ああっ……んううううう……」

ブラウスとブラ越しに乳首を吸いながら、聡志は再び両胸を揉み始めた。

胸に顔を埋める形になったために、由美那の肉房の柔らかさが鼻先に伝わり、甘いミルクのような香りが鼻腔に充満してくる。

唇には吸い付いた乳首が膨らんでいるのが感じられ、聡志をさらに興奮させてきた。

（由美那の乳首、もうこんなに勃っちゃってるし、もう一つも……っ!?）

グミのようになつた乳首を感じ、もう一つの乳首を吸おうと口を離れた聡志は、目の前で上下していた彼女の胸に目を吸い付かせた。

夢中で揉み吸っていたために、彼女のブラウスは彼の唾液で完全に透けてしまっていたのだ。しかも、夢中で乳首を貪っていた所為でブラがずれ、右側の胸がほとんど露出している。

（見えてる、由美那の乳首っ！）

柔房を揉むことも忘れ、彼は柔房の頂に集中した。

真円に色づいた乳輪は小さく、その中心で薄ピンクの乳首が小指の先ほどの大きさになつてフルフルと震えている。

思わずまた口を含み、吸い付きたくなってしまうほど可憐な乳芽だ。

「はあはあはあ……もう満足したんですの……、でしたら胸から手を放し……っ!?」

(どっ、どうして乳首が見えて……、しかも聡志がじっと……)

自分の胸を見た由美那は驚いた。まさか、くすぐったかった乳首が、ブラから零れて見えているとは思わなかった。しかも、完全に聡志に見られている。

しかし、隠そうという気持ちがおこらない。

(なにか……なにか変な気持ちですわ、下僕にこんな思いにされるなんて、少し悔しいですわね……)

それどころか、持ち前の負けん気で悔しさが込みあげてきた。

彼に気づかれていないだけで、お嬢さまの太腿には一本の蜜が伝い始めている。

(わたくしも、聡志を同じ気持ちにしてみせますわっ)

負けず嫌いなお嬢さまは、そっと右手を彼の股間へと動かした。

※

「由美那の乳首、もう一つも……うわあっ!？」

薄ピンクの頂が網膜に焼きつくほど見た聡志が、再び胸を揉みながらも一つ一つの乳首に吸い付こうと口を寄せた直後。突然勃起したペニスになにかが触れてきた。

「わっ、わたくしの胸を見て、こっ、こんなにするなんて……、なっ、なにを考えているんですのっ……」

笑みを浮かべてののしる彼女だが、完全に照れ隠しだと分かる。

言葉はところどころ詰まり、胸を揉んでいる掌からは、彼女の鼓動がドクンドクンと大きくなっているのが伝わってきた。

ズボン越しにペニスをさわる手はただたどしく、まるで怖がっているようにも思える。しかし、そんな手の動きでさえ、異性のものだと簡単に反応してしまう。

「ちよっ、ちよっ」と由美那……なにさわってるんだ」

「なにつて、あっ、あなたの大事なも、モノよ……わたくしのちくっ、胸を勝手に吸って見た仕返しなんだから……か、覚悟しなさいっ」

由美那が戸惑いながらもペニスをズボン越しに撫で回し、揉んでいた彼の手を放させながら跪いていく。

「おま……なににする気なんだっ」

慌てふためく聡志をよそに、お嬢さまが彼のベルトを外し、ズボンのファスナーを引き下ろした。

「おまえ、なにしてんのか分かってんのかよっ！」

「わっ、分かっていますわ……、このわたくしに恥ずかしいことをしたげ、下僕に、仕返しをしてまっ、ますのよ……」

「仕返しって、これは違……うおっ!？」

いきなりズボンごと聡志のトランクスを引き下ろし、由美那が戸惑いながらも勃起したペニスに触れてきた。

プライドの高いお嬢さまが、恥ずかしがりながらも自分のペニスに触れていることに興奮し、彼女の暖かくて羽毛のように柔らかな手が少し動くだけで、ペニス全体がムズムズして腰が引けてしまう。

「こっ、これが男の人のっ!? なっ、なんて醜くてくさいモノなんですか……、触れただけでこんなにピクピクさせて、こっ、これだから男って嫌ですわ……」

「仕方ないだろ、こんな状態で女にさわられたら誰だって……くおっ!」

そんな男が嫌いならさわらなければいい。と思うのだが、彼女はやめようとしないう。それどころか細い指を震わせながら幹に絡め、右手でペニスを包むように握ってきた。

「マジでヤバイって、これ以上なにかされたら俺……」

「い、嫌よ、こっ、これは仕返しして言った……んですから……」

「くううっ……」

完全に攻守が逆転されてしまった。

実際、彼女にこれ以上なにかされる前に逃げることは可能だが、まるで握られたペニスで身体をコントロールされてしまったように動けない。

由美那もそんな様子が楽しくなったらしく、右手を上下させてペニスを刺激し、切っ先からトロリとカウパー液が溢れる様子を興味津々と見つめている。

「くうう……ヤバ、このままじゃ本当に出る……」

「なっ、なにが出るっていうんですの……」

完全にお嬢さまは男の反応を楽しんでいる。本当に財閥の令嬢かとうたぐりたくなってしまうような姿だ。香澄と経験していなかったら、とっくに彼女の手で情けなく放出させられているような刺激が、ペニス全体をムズ痒く包んでくる。

「おまえ一応お嬢さまだろうっ、少しは恥じらいつてものを……」

「な、何度も仕返して、いつ、言っているでしょう。まだおっ、おしおきされたいのなら……はむ……」

「おしおきって、なにを言ってる……ひよふへっつっ!!」

マヌケな声とともに、聡志は情けなく腰を思いっきり引いた。

突然ムズムズとしていたペニスが、温かく湿り気のある空間に包み込まれてしまった。確認するまでもない、由美那がおしおきの名のもとに、いきなりしゃぶりついてきたのだ。

もう聡志は奥歯を噛み締めて射精を我慢するだけで精一杯だ。プライドの高い美少女がペニスを扱ただけじゃなく、自分の股間に顔を埋め、その口に性器の半分ほどを含んでいる。

(これ……絶対に仕返しじゃないってっ)

いくら彼女が「仕返しっ」と言っても、これはもう完全な奉仕だ。少年はペニスに血液が集まっていくのを感じながら、必死に腰を振るのをこらえた。

「ふうえったひ、恥ずふあひくひてあげふんらから……んっ……んっ……」

「うああああっ、しゃぶりながらしゃべるなっ。舌が先つちよに当たって……くっ」

しゃべられて嘸まれるような痛みはなかったが、偶然亀頭に当たってきた舌に腰が崩れそうになってしまふ。しかも彼女は金色の頭を股間で前後させ、長いツイントールの毛先を床で泳がせながら、本格的にペニスを責めてきた。

口の動きで経験がないことは分かるが、本当は淫乱なんじゃないかと疑いたくなる。

「チュふあつ……んう……んっ……ふうふはっ……ちゅはっ……んん……」

(くうああつ……なんか上手くなってきた……)

さすがといふかなんと言ふべきなのか。負けず嫌いの彼女は飲み込みが早い。

聡志の反応したことを全て覚え、唇で幹の部分締め付けながら、舌先で亀頭をペロペロと舐玉を転がすように舐めてくる。

「んふうパッ……んん……聡志……気持ちいいひれしよ……んチュッ!」

「うああああつ!」

しゃべった舌がいきなり亀頭の先割れを直撃し、突然ペニス全体から伝わってきたムズ痒さに、思わず射精しそうになってしまった。

「ふふ……ここ、弱いんですね……なら……ちゅばっ……んちゅ……んちゅ」

「うおおおっ!? くっ……ちよ……ほんとにもうっ……」

先割れが弱いことに気づいたお嬢さまが一度ペニスから口を離し、はにかみながら話すと、今度は亀頭だけを啜えて何度も切っ先を責め立ててきた。

さすがにこの責めは我慢できる刺激じゃない。聡志の全ての神経がペニスに集まったよ

うに敏感になってしまい、激しい痒さとともにペニスが膨らんでいく。

いたずらのようにペニスを責めている彼女を見てみれば、透けていたブラウスが肉体の火照りと部屋のを蒸した空気ですらに透け、上半身の肌やピンク色のブラが完全に見える。しかもスカートの後部が捲れ、形のいい桃尻の割れ目に喰い込んでいるハイレグ気味のショートツまでが見えていた。

（うわっ、由美那のブラウスあんなに透けて、お尻まで見えてるじゃんか。もう我慢できない。フェラしてきたの由美那だし、別にいいよな）

ペニスを刺激され、視覚的にも興奮させられた男が我慢する必要などない。

それに、仕返しと言いながらフェラチオをしてきたのは彼女の方だ。ペニス全体から伝わってくる強烈な疼きと痒みに、とうとう聡志は彼女の頭を両手で押さえてしまった。

「由美那、もう俺っ！」

「んん……らに……んぶっ……んう……んんんんっ!」

ペニスの内部をくすぐってくる気持ちよさに任せるように、自然と腰を振ってしまった。喉にまではめ込むようなフェラを拒むと思っていた由美那も、仕方ないとはかりにきつく瞳を閉じ、眉間に皺を寄せながら、黙って耐えてくれている。

「うああっ、由美那……もう出る……出ちゃうっ」

「んああっ……ふあむっ、ちゅぱっ、ちゅぶっ、んっ、んぱあああっ！」

腰を動かしても抵抗しないお嬢さまに、もう遠慮することなどない。聡志は思うまま腰

を振って彼女の唇を楽しみ始めた。

温かいお嬢さまの口の中で、彼女の唾液にまみれて粘膜や舌に擦れるペニスは、急速に放尿にも似た激しい疼きで包み込まれ、内部に精液が駆け登っていく。

少しでも長く持たせようとしても、彼女が与えてくれる刺激でペニスは膨れ、自分ではもうどうすることもできない状態だ。

「うはっ、はあはあはあ」

「んあっ、んっ、んっ、んっ、んっ!」

息を荒げながら由美那を見てみれば、長いツイントールをユラユラと揺らしながら真っ赤な顔で見上げていた。唇の端から唾液を零している彼女の青い瞳は潤み、しかもその瞳が「我慢しないで出さないっ」と言ってきた。

(いいんだよね、このまま出しても。由美那の口の中に……)

今までわがままに命令してきたお嬢さまの口に射精する。その興奮がペニスをさらに膨らませ、急激にペニス全体が激しい疼痒みに包まれてしまった。

とめようとしてもどんどん精液がペニスを駆け登り、射精しようと亀頭を限界まで大きくしていく。

「くはっ! もう出るっ、由美那の口に出すからなっ、くあ……うわああああっ!」
びゅるるるっ! びゅぶ、びゅふるるるるるるっ!

「んあ、んっ、んううっ?! んんんんんん——っつっつ!」

痺れるような射精の快楽に耐えられず、由美那の口の中に思いつきり精液が飛び散っていく。しかも、何度もペニス全体を引き攣らせ、下半身がグズグズに崩れそうな快楽を感じながらの射精だ。

聡志の頭の中は真っ白に染まってしまった。

(出しちゃった……由美那の口に……気持ちいい……)

お嬢さまの口を自分のものにした達成感と、射精の快楽に下半身が痺れ脱力していく。すぐにでもその場に座りこみたい気分だ。

射精の余韻に浸りながら目を彼女に向けてみれば、眉間に皺を寄せながらペニスを咥え、口の中に溜まった男の体液をどうすればいいのか困っている。

「由美那……吐き出していいから」

「んううう……んう……ゴクッ……んくっ……んくっ……んん……」

吐き出させようとペニスを彼女の口から抜こうとした途端、いきなり由美那は喉を動かして精液を嚥下し始めた。

プライドの高いお嬢さまが、自分の精液を飲む姿を驚きながら見ていれば、彼女は口の端から唾液混じりの精液を零しながらも、瞬く間に全て嚥下してしまい、清めるように亀頭まで舐めてやっとな口を離れた。

「んはっ……はあはあはあ……こほっ……まだ、こんなにしてるなんて……」

昂揚した顔で息を荒げる彼女が、艶めかしい声とともにまだ勃ったままのペニスに手を



「はくううううっ！」

「んはあああつっ！」

三人の少女から同時に嬌声があがった。

しかも秘孔が新たな刺激に歓喜して舌と指とペニスをきつく締め付け、バシヤバシヤと女蜜を溢れさせてくる。

「すごいよお、聡志のおちんちん……わたしのオマ○コの中で暴れて……イッて……早くイッていっぱい射精してええええええッ！」

取り合いのように始まった4P。しかも一人でペニスを膣に入れていた幼馴染みが、優越感を感じながら絶頂に駆け登っていく。

狭い膣壁は断続的にキュウキュウと締めまり、子宮口が亀頭に吸い付き、精液を吸い取ろうと尿道の中まで刺激してきた。

(理穂のマ○コがすごい吸い付いてきた……でも……)

気持ちよさは感じる。しかし、まだ射精感が込みあげてこない。何度も挿入してれば射精しそうだが、なにか物足りなさを感じる。

「きゃふっ！ あふっ！ ダメわたし……わたしだけなんて……、はフふうんっ、んっ、ふあッ、ひゃいはいはいはいはい——
——ッッ！」

しかし、絶頂しかかっている幼馴染みにそんなことは関係ない。

聡志と一緒に達せないことを悔しみながらも、秘孔の奥までペニスを迎えて上下させて

いた肢体を硬直させ、大量の愛液を飛沫させながら嬌声を張り上げ始めた。

小さな膣は収まったペニスが潰れるほどうねる壁で圧迫し、まだ出ない精液をなんとか迸らせようと、亀頭に被さった子宮口で鈴口を吸いまくってくる。

「んあッ……んう……ッ……ッ……ッ……」

絶頂した理穂が、短い呻きを何度も繰り返しながら聡志の身体の上に倒れこんできた。自分からした騎乗位でのセックスで絶頂してしまった彼女は、全身に駆け巡った悦痺れで弛緩してしまい、聡志の上で放心したまま動かなくなってしまった。

「あうっ！ 私……あんなに気持ちよさそうな姿見せられたら、もう我慢できませんっ」
絶頂に弛緩してしまった理穂と対面するように顔面騎乗していたメイドが、突然切なうな声で全身を小刻みに震わせ始めた。

淫部は左右の淫唇を大きく広げて蠢き、秘孔からトトロと白みがかった愛液が滴り落ちてくる。

「香澄さん……どうし……」

「申し訳ありませんお嬢さま……私、私もう限界ですっ！」

香澄の異変に気づいて話しかけようとしたが、もう彼女は我慢の限界に達していた。

肉体の疼きに耐えられなくなったメイドは、栗色の長髪を揺らしながら聡志の顔から離れ、弛緩した幼馴染みを押し退けて聡志の上から退かしていく。

「ちよ……んあッ……」

半ば放心していた理穂が濡れた呻きをもらしながら退かされ、大きめなベッドの上に転がされた。彼女の狭腔に収まっていたペニスは、ピョコンツと跳ねるように飛び出し、愛液にまみれたままピクピクと切っ先を上下させている。

「くう……っ！」

狭い秘孔に亀頭を擦られながら出されたムズ痒さに、思わず呻いてしまった。

しかし、そんな一時的な気持ちよさを感じている暇などない。

幼馴染みの愛液にまみれたペニスの上には、大人びた美貌を色っぽく火照らせた香澄が跨がり、スカートを捲つて淫部を見せながら腰を下ろしてきた。

「聡志さま、私にもください……。熱くて硬いモノを……お腹の奥にまで……んはっ！
んうううううう……っ！」

ジュプ……ジュプジュプジュプウウウウウウ……。

「待つて香澄、それわたくしの……」

主人であるツインテール美少女の声も気にせず、メイドが一気に腰を下ろしてきた。

（うわあああ、香澄さんの中……いっぱいのザラザラした髪が迎えてくれて……）

幼馴染みの幼い感じの狭腔とは違い、ネットリと髪を絡めて優しく包む香澄の腔内に、聡志は反射的に腰を思いつき突き上げてしまった。

「んはあああッ!? いいです聡志さまッ！ 久しぶりの聡志さまに、お腹の中が熱くてキ
ュンキュンしちゃいますうううううッ！」

一度突き上げただけで、メイドが長い栗髪を振り乱して悶えてくれた。

膣は大きくうねりながら舐め溶かすように。ペニスに絡み、腰を動かしていなければおかしくなってしまいそうな疼きを与えてくれる。

「くああつ！ 気持ちいいよ香澄さんの中っ、鬘が絡まってきて……すぐに射精しちゃいそうだよっ！」

「はうッ！ んん……嬉しいです聡志さま、私のアソコも胸も聡志さまのものですッ、いっぱい突いて……この大きな胸も吸ってええええッ！」

嬌声をあげたメイドが仰向けになっていた聡志の上半身を引き起こし、由美那に見せ付けるように大きな峰乳を揺らして誘惑してきた。

「うわっ！ すごい、こんなにおっぱい揺らして、乳首もこんなに大きく……ちゆる」

対面座位の姿勢。しかも目の前でこんなに魅力的な峰乳を揺らされて、我慢ができるはずがない。彼はおもむろに大きな胸に顔を埋め、柔房の温かさを顔面全てで感じながら、小指の先大になって尖っていた彼女の左乳首に吸い付いた。

「ソッ！ ソふッ……気持ちいいです……アソコもおっぱいもよくて……はうッ！ 聡志さまももつと、もつと私で感じてくださいッ！」

ジュプッ、ジュリュ、ジュプジュプ……。

初めての時以来のセックスに、彼女は激しく興奮していた。

もう放さないとばかりに聡志の頭を両手で胸に抱え込み、乳首を強く吸わせながら、肢

体を激しく上下させて大きなお尻を左右に振ってくる。

(香澄さんこんなエッチになって、こんなにされたら俺すぐに出ちゃうかも)

普段からは想像できない彼女の姿に、理穂の膣では射精しなかったペニスが急にムズムズとしてきた。

熱い膣内で、ネットリと絡まるザラ襞に亀頭まで擦られ、動かそうとする意思がなくても腰が自然と動いて大人びた彼女を突き上げてしまう。

「ああッ！ んッ！ 熱くて硬いのに膣内が擦られて……ひゃふッ！ イキそう……」
襞を掻きむしるように突き上げた膣の刺激に、メイドがうっとりとした表情で快楽を教えた。

しかし、聡志を独占しようとした彼女を他の二人が放っておくわけがない。

「なっ、なにをしているんですの香澄っ、聡志はわたくしのもので、自分だけで気持ちよくなるうとするなんてっ！」

「わ……わたしが先にシてたのに……、そんな大きなおっぱい見せて誘惑するなんて、反則でしょっ！ この淫乱メイド！」

由美那と弛緩から復活した理穂が、彼を独占しようとする香澄に対抗してきた。

お嬢さまは膣に聡志の指を挿入したまま右腕に抱き付き、双乳で二の腕を挟みこんで、まるで腕全体をペニスに見立てるかのよう奉仕してくる。

理穂も負けまいと左腕に抱き付き、さっきまでペニスを収めていた狭膣に彼の指を挿入

させて胸を押し付けてくるが、彼女の胸が二の腕を挟めるはずもなく、乳首を擦り付けてくるだけだ。

(三人ともすごいって、チンポや指がみんなのアソコで締め付けられて。誰の中に挿れるのか分からなくなっちゃいそうだ)

メイドと対面座位でセックスしながら、お嬢さまと幼馴染みに腕奉仕され、聡志はだんだん誰と繋がっているのか分からなくなってきた。

一度腰を動かして秘孔を突く度に、自分を取り囲む三人が同時に濡れた声で喘ぎ、指やペニスの根元がきつく締め付けられてくる。

「はあはあはあ、みんなすごくて……ペニスがジンジンとしてとまらなく……」

ジュブ、ジュブ、ジュブ！

「あうッ！ 聡志さまそんなに激しくッ、嬉しいですよ……私の身体で感じてくれて……はッ！ 嬉しいですようッ！」

聡志が自分で感じていることが嬉しい香澄が、膣内を大きく蠕動させながら肢体をピクンと跳ねさせてきた。峰乳は千切れてしまうほど大きく目の前で揺れ、しゃぶっている乳首が舌の上でフルフルと震えている。

「香澄さんの中、すごくなって……ぐっ!？」

膣の変化にペニスが激しいムズ痒さに襲われた瞬間。彼女の胎内で下りてきた子宮口が切っ先に当たってきた。

初めて感じたメイドの子宮口は、今にも亀頭部を呑み込もうと口を広げて切っ先に吸い付き、まるで舌先でくすぐられているような刺激を与えてくる。

「きゃんんんッ！ 聡志さまの奥に……奥にまで当たって……あはあううッ！」
子宮を突き上げたペニスの感触に、大人びた美少女が長い栗髪を振り乱して応えてくれた。腰を動かして肢体を突き上げる度に、香澄は歓喜の悲鳴とともに全身を震わせ、自分だけでは嫌だとはかりに膣壁をペニスに絡めてきた。

「くっ、香澄さんすぐいいよ……クチュ」

「んああさッ！ 私も……私もですッ！ 初めての時よりもよくて……んん……」
彼女の大きな胸から口を離し、気持ちよさを伝えるように唇を重ねる。

「ず、ずるいですわっ……わたくしには手でするだけなのに……香澄にだけ……」

「聡志……わたし……わたしもお……」

熱いキスをする姿に嫉妬したように、お嬢さまが割り込んできた。幼馴染みも同じように割り込み、聡志の舌を奪い合うように彼女たちの舌が絡まってくる。

「んちゅぱっ……んく……は……息が……」

窒息してしまいそうだ。

彼女たちが次々にキスを求めて舌を絡めてくるために、息をする暇もない。

しかし彼女たちはやめようとはしない。お嬢さまと幼馴染みは秘孔で指を締め付けながら二の腕を双乳で刺激し、メイドは肢体を上下させながら、魅惑的なお尻を左右に振って

快楽を求めてくる。

(そんなに激しく動かれたら出ちゃうって……)

口で言えず目で訴えてみる。だが香澄は快楽を求めることをやめられずに肢体を上下に動かし、膣内の襞をネットリと絡ませて優しくペニスを抜いてくる。

幼馴染みの狭膣に続いて、優しく包むようなメイドの膣の感触に、ペニスは少しずつ膨らみ、激しいくすぐったさとともに射精感が込みあげてきた。

少しでも長く持たせようと視線を泳がせてみるが、三人の少女に囲まれた状態ではどこを見ても白い肌しか見えず、大きさの違う六つの柔房が興奮を高めてくる。

「うわあああつ！ もう……もうだめだつ、香澄さん……香澄さんっ！」

メイドの襞を絡ませて抜く膣の感触と、指に感じる由美那と理穂の膣の締め付け、そして自分を取り囲むように揺れる彼女たちの胸に、とうとう限界が近づいてきた。

肉幹の中をくすぐるように登ってくる射精の感覚に我慢ができず、腰を思いつきり動かして彼女の大人びた肢体を突き上げてしまふ。

「くはあううッ！ 激しッ……強すぎます聡志さま……あうッ！ 奥に当たって……壊れ……はうッ！ んッ、うッ、はふッ、くうんんんッ！」

もうとまらない。

聡志は射精に向け心地いい膣内を掻き乱した。

秘孔を突くのと同時に、お嬢さまと幼馴染みの膣に挿入した指も曲げてGスポットを指

先で擦り、全員同時に絶頂させようと刺激しまくる。

「あんんっ！ はふううううっ！ どっ、どこをさわっていますの……はうっ！ ばか聡志……ばかああああああああっ！」

「きゃひっ！ なにこれ……ひやつ、指だけなのにオマ○コが痺れて……おしっこ……おしっこ漏れちゃいそうだよおおおとおおっ！」

膣内の敏感部をさわった途端。二人が腕にしがみつきながらお尻をモジモジとくねらせ始めた。秘孔からは大量の愛液が溢れ、ベッドの上に淫らな染みを広げていく。

「うわっ！ もう限界だ……出そう……香澄さんの中に……くっ、くううっ！」
ペニス全体が激しい疼きとくすぐったさに包まれ、絡み付く褻が少し擦れるだけで頭の中が真っ白になってしまいそうだ。

肉幹はビクビクと脈動し、内部に少しずつ精液が駆け登ってくる。

「あうっ！ 聡志、まさか香澄の中に出すつもりですの……、許さないから……わたくし以外の中に出したら許さないからっ！」

「ダメっ！ 聡志……他の女なんか射精しちゃ絶対にダメっ！」
と言われても、込みあげてくる射精感を抑えることなんてできない。

甘えた声で抗議する由美那と理穂を気にしながらも、射精に向け腰を突き上げ続けた。

「くあっ！ 出る……でるうううう」
ペニスから股間全てを包み込むような痺れが走り、亀頭がムクムクと膨れていく。尿道



は痛むような痺れとともに精液が駆け登り、もうなにも考えられない。

「あんんッ！ はうッ！ 申し訳ありませんお嬢さまッ！ あうッ、私もう……もう聡志さまに出してもらわないと、おかしくなってしまうすうううッ！」

ジュプッ！ ジュリュッ！ ジュプジュプッ！

二人の少女の目の前で、聡志と香澄の腰が徐々に速まっていく。部屋には淫らな挿入音が響き、塊りのような精液がペニスを痺れさせながら亀頭へと一気に駆け登った。

「いきます香澄さんっ！ くっ、くうあああああ——っ！」

「はふッ！ いっぱい出してくださいッ！ んあッ……私もッ……私もイキますううううううううううう——ッ！——ッ！」

どびゅぶるるるっ！ びゅぶる……びゅぶびゅぶびゅぶるるるるるるるるるるるっ！

精液を搾り取ろうとするメイドの膺の動きに耐えられず、聡志は彼女の子宮口に亀頭を勢いよくはめ込み、ムズ痒い痺れとともに精液を放出させた。

子宮に精液の直撃を受けた香澄も、肉体を蕩けさす刺激に大きな峰乳を押し潰すように彼を抱きつき、肢体を痙攣させながら絶頂に駆け上がった。

ペニスに絡み付いた何枚もの髪は、数日ぶりに注がれた精液に喜ぶように幹を舐めまくり、亀頭に吸い付いた子宮口が歓喜に震え、秘孔から溢れるほどの愛液を滲ませてくる。

「んあ……はあはあはあ……聡志さま……」

身体を痙攣させ終えたメイドが、うっとりとした表情でペニスを萎えさせないようにお

尻をくねらせ、絶頂後で激しく蠕動を繰り返す膣で刺激してきた。

しかし、そんなことをする必要はない。聡志のペニスは射精したにもかかわらず、香澄の中で勃起したままだ。

(どうして俺、まだ……)

自分でも不思議だった。萎える気がまったくしない。あと数回でも平気でセックスし、大量の射精をできそうな気がする。

「聡志さま……ステキでした……んッ……んああ……」

ジュリユリユ……ちゅぽっ!

香澄が緑の瞳を潤ませながら、名残惜しそうに腰を浮かしてペニスを引き抜いた。

彼女の膣からはコポコポと愛液と精液が混ざった体液が溢れ出し、もう一度受け入れたいとばかりに、抜けたばかりのペニスに滴り落ちてくる。

「くあああ……なんか変だ、出したばかりなのに……もう疼いて……」

辛い。膣から引き抜かれたペニスが鋭い疼きに包まれ、ほとんど拷問のような責め苦が押し寄せてきた。快楽を失った肉幹は大きく震え、その度に痛みが押し寄せてくる。

「聡志さま、んっ……立ってください……」

香澄に言われるまま、二人の少女の秘孔から指を引き抜いてベッドに立ち上がっていく。絶頂に達した彼女も、脚をプルプルとさせながら聡志とともに立ち上がり、艶めかしい吐息を繰り返しながら秘孔から精液を逆流させた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>